

ポスター | ポスター2

## [P]ポスター2

Sat. Dec 14, 2019 4:30 PM - 5:30 PM Poster venue (East Building 3rd floor, D Conference Room)

## [P-39]退院時自立支援サービスへの取り組み

\*上拾石 ゆい<sup>1</sup>、春田 里奈<sup>1</sup>、久留 千幸<sup>1</sup>、税所 裕也<sup>1</sup>、瀬戸口 僚<sup>1</sup>、有川 由華<sup>1</sup> (1. 医療法人 玉昌会 加治木温泉病院)

Keywords: 自立支援、訪問指導、応用的ADL

## 【はじめに・目的】

入院から在宅へスムーズに移行するためには、退院前訪問指導等を通して、在宅での生活を想定した介入が重要である。しかし、想定した退院後の生活と実際の生活には差があり、特に院内で実施機会が少ない家事などを含む応用的 ADLについてはその差が大きいと予測される。

そこで当院では、退院後にリハビリスタッフが訪問する退院時自立支援サービス(以下、支援サービス)を行っている。本サービスは、退院後2~4週間後を目処に対象者宅を訪問し、身体機能や ADL、応用的 ADL、福祉用具、住環境等について評価し助言を行うものである。今回は、特に FIMと Frenchay Activities Index (以下、FAI)の関係、応用的 ADLへの指導内容を中心に分析し、支援サービスの現状について若干の知見を得たので報告する。

## 【方法】

対象は平成29年7月から令和元年5月に支援サービスを利用した81名である(82.4±70歳、介護保険非該当9名、要支援20名、要介護52名)。

退院時と支援サービス利用時の ADLを FIMで、応用的 ADLを FAIで評価した。退院時と支援サービス利用時の FIMをウィルコクソン検定にて比較した。また、支援サービス利用時の FIMと応用的 ADLとの関連をスピアマンの相関係数で分析した。

代表的な症例の応用的 ADLの実施状況や指導内容について検討を行い、支援サービスの現状について検討した。

## 【結果】

退院時と支援サービス利用時の FIMの中央値はそれぞれ105点、106点であり、有意な差を認めなかった( $p = 0.0644$ )。FAIの中央値は7点であった。FIMとFAIの相関係数は  $rs = 0.689$  ( $p < 0.001$ )であり、FIMが高得点な者では応用的 ADLの実施状況のバラツキが大きくなる傾向を示した。

腰椎化膿性脊椎炎を呈した70歳代女性は、支援サービス利用時の FIMは120点であり、食事の用意、外出、屋外歩行を実施していた。一方で、庭へ出ることが困難であったため、趣味の庭仕事の実施が困難であった。そのため、同行したケアマネージャーや福祉用具業者と相談し、掃き出し窓に手すり付き階段を設置することで移動を可能とした。

肺炎後に廃用症候群を呈した90歳代女性では、支援サービス利用時の FIMは102点であり、調理、買い物を実施していた。一方で、入院前に可能であった洗濯の実施が困難であった。そのため、洗濯機の使用方法や動作指導を行い、動作の難易度を調整した。

## 【結論】

支援サービスを実施することで実際の生活に応じた指導、助言を行うことが可能であった。特に応用的 ADLについては、入院中に想定していなかった課題が見つかることも多く、実際の生活に対する評価・介入の必要性が示唆された。

## 【倫理的配慮、説明と同意】

本研究は当院の倫理委員会の承認を得たものであり、ヘルシンキ宣言に則り実施した。